

昔々、子供のいない夫婦がいた。彼らは子供を産むのに問題があったが、彼らは金持ちだった。彼らの唯一の問題は子供を産むことだった。彼らは相談に行ったが成果はなかった(彼らはやれることをすべて試したがうまくいかなかった)。しかし、彼らへの診断書にはこう書かれていた「貧しい者たち(特に貧窮者)に施しをしなければならない。それによって神は彼らの要求に応えるだろう」。

彼らは施しを与えることを始め、そして神は彼らに応えて彼らに子供を与え、彼らに男の子が生まれた。彼はカーデルと名付けられた。

コーラン学校に通わなければいけない時期になると、神は彼に優れた知性を与えた。すべての生徒たちの中で、先生は彼を大層気に入っていた。毎金曜日、生徒全員は先生に言われた作業を行うために野原に行ったが、カーデルは別だった。というのも、先生はカーデルをとて気に入りだったので、いつも側においていたのだった。だから、生徒全員が先生の作業をする時、カーデルは別で、先生はすべての生徒のうちでカーデルが一番大事で頭が良いと認めていた。

そして、他の生徒たちが、悪いことに、カーデルに対して悪意を抱く時がやって来た。或る日彼らは野原に行き、そこに大きな木があったのでシーソーを作り、鋸でひいて罫を仕掛けた。次の金曜日、彼らは先生に「作業をするのにカーデルと一緒に野原に行きたい」と頼み、先生はカーデルを彼らに委ねた。そして彼らは出発した。彼らは仕事をし、薪を集め、それから言い合った「シーソーで遊ぼう」。それから、彼らはカーデルが最初にやることを決めたが、それは彼が決して外に出ず、コーラン学校と家の往復しかならないからだった。ということで彼らは彼をシーソーの上に追いやって、1回、2回と揺すり、3回目に彼は雨溝に落ちてしまった。彼が雨溝に落ちた後、生徒たちは相談した。

「よし、これで先生には、《カーデルが最初に出発して、誰も彼を見てないし、どこに行ったのか知りません》と言うことにしよう」。

彼らはその計画で出発し、先生にかくかくしかじかと物語った。

長い時間が経ち、カーデルの父親は悲しんでいた。ひとり息子だったからである。両親はとても悲しんだ。彼らはラジオで放送することを始めた。彼らはあちこちで放送し、行方不明の子供を探していること、彼を見つけた者には誰であろうと多くの金を褒賞として与えることを伝えた。

それからまた、長い時が流れたが、或る日、村の男が山羊用の葉を探しに野原までやって来た。彼は雨溝のすぐ脇までやってきて葉を刈った。カーデルは誰かが葉を刈っているのを聞き、その人に言葉をかけたが、それは歌で伝えた。

「葉を刈ってるお方／村に行くなら／父母に申して下さい／カーデルは死んでおらずと／元気で生きていて／髪は剃っておらず」。

カーデルはこう表現したかった。「その葉を刈っている方、もし村に行くことがあれば、父と母に、カーデルは死んでいないで元気に生きているけど、髪と爪は伸びすぎて、ぞっとさせるし、醜くなっている、と伝えてください」。

彼は葉を食べて飢えをしのいでいたのだった。カーデルはもう一度繰り返し、男は駆けて村まで行き、村人を呼んで言った。

「おれはカーデルの言葉のようなものを聞いた」。

それで、当局やら村人が野原に行き、件の男は彼らに示して言った。

「ここが、声が起こるのをおれが聞いたところだ」。

そこでかれらは仕掛けを作って、カーデルを登らせ、連れて帰った。彼らは、カーデルの髪と爪が伸び放題なのを見た。彼は、過ぎ去った年のせいで醜くなっていた。彼らは、カーデルを村まで連れて行った。爪を切り、髪を切り、きれいに洗ってやった。彼が見つかった場所を教えた男は、約束の報酬をもらった。残っているのは、仲間を打ち捨てた者たちの処罰だった。(村の)或る者は、「首を刎ねるべきだ」と言ったが、カーデルは自分の意見を述べた。

「彼らは、私を打ち捨てたと言われています。しかし私は自分が生きていた場所で学びました。聞いたり見たりしたこと、そして我々に悟らせることから。私がそこで学んだことというのは、私が認めるには、こういうことです。もし我々の知性(我々の考え方)が、同じものであるならば、命など存在しないでみんな死ぬだけです。それにも、知性と心が同じものであるならば、やはり生命など存在しないでしょう。すべてがこのように働いているのです。だから、人はそれぞれ、この世にやってくるために普通は苦痛の中で生まれます。ですから、苦痛と喜びを支配しなくてはなりません。僕はといえば苦しみの中にいました。社会には、悪人も善人も、犯罪者もみんな一緒に共存出来ています。我々の誰もが、他者を必要としています。だから、彼らは私の兄弟です。彼らは私に悪いことをしました。しかし、私は彼らを殺して下さいとは言えません。私にしてみれば、自分のちっぽけな知性で言えるのは、彼らを兵隊にすることです。彼らは犯罪者ですが、それで殺すことはないのです。何故なら、もし彼らを殺しても、我々には何の益にもならないからです。彼らを兵隊にしてください。悪人となっても国に迎えられるでしょう。彼らは、兄弟である私を哀れむことにはならないと思います。彼らは私を気の毒に思ったのですから。厄介者について話すのはもうやめましょう」。

高官たちは、この考えを高く評価した。彼らは、カーデルの父と先生に会いに行き、要請した。

「この子を我々高官が育てるように委ねるべきでしょう。というのも、我々が指導すれば、多分彼はその結果、国を助けられることになるだろう」。